

# かほくがた

発行／NPO法人河北潟湖沼研究所

通信かほくがた

vol.30-3

2025年8月30日



## CONTENTS

河北潟湖沼研究所30周年記念事業 1p  
東北視察の報告(2024年9月)  
宮城県～福島県の海岸を歩いて 2p

河北潟カヌー体験・カヌーでゴミ拾い 6p  
河北潟の仲間たち・69 ヤモリ 7p  
外来種を活用した環境体験イベント 8p  
親子参加の田んぼの稲刈り報告

## 河北潟湖沼研究所 30周年記念

河北潟湖沼研究所の設立30周年を記念しまして、2024年11月9日（土）に河北潟湖沼研究所30周年事業を開催しました。吉倉交流館を会場として、河北潟湖沼研究所において中心的に活動しているメンバーはじめ、活動に協力いただいている皆様、そして津幡町吉倉の集落の方々を招待し、全体で33名の方にお越しいただきました。

当団体の活動で生産した米や野菜を材料に、理事長をはじめスタッフで食事を準備し、屋外ではバーベキューがおこなわれました。会食やアトラクションを

挟んで、3部形式のディスカッションを行いました。第1部では、第1期（1994年～2008年）の振り返りとして、桂木健次氏による記念講演と、ゲストの方々による座談会が行われました。第2部では、第2期（2008年～2023年）の振り返りとして、高橋（研究所理事長）と永坂（研究所所長）による活動実績・研究成果の報告と、座談会が行われました。第3部では、川原と南葉（研究所スタッフ）による最近の活動についての報告と、今後の流域での活動を展望するディスカッションが行われました。

2024年9月9日～10日、熊谷佳二さん（蒲生を守る会）、遠藤源一郎さん（遠藤環境農園）、黒沢高秀さん（福島大学）に現地をご案内いただき、宮城県仙台市の蒲生干潟、仙台市宮城野区新浜、宮城県～福島県の海岸堤防を訪れました。

### 蒲生干潟(仙台市宮城野区)

蒲生干潟には今回初めての訪問となり、真っ白な気持ちで干潟を歩きました。

9月10日午後1:40に蒲生干潟の駐車場に到着。迎えてくださった熊谷先生は、長ズボンに長袖、帽子に双眼鏡のフィールド調査の完璧な姿で、とても素適な印象を受けました。駐車場の目の前は堤防で、堤防手前の階段横に蒲生干潟の生きもののつながりが描かれた看板があります。堤防の斜面には草が茂っていて、自然への配慮がうかがえました。そこから、堤防にあがると印象は一変しました。堤防の上から干潟側の斜面一面が、隙間の無いコンクリートで覆われ、それが海と陸の境界線かのように南北に続いています。



蒲生干潟の看板前にて

防潮堤の上から望む蒲生干潟と七北田川河口（↓）



巨大防潮堤を下から見たところ

この日の干潮時間は午後0:20、潮が引いた干潟には、コメツキガニやチゴガニがいて、それらが出入りする巣穴が無数にありました。また七北田川河口の砂地にはスナガニがたくさんみられましたが、日中姿を現すのは珍しいとのことでした。付近では慣れた雰囲気の釣り人が点々と10人程いました。

蒲生干潟は2011年の東北地方太平洋沖地震による大津波の影響により、干潟と海の境となっている砂浜がえぐられ、松林やヨシ原が消失して干潟生態系が打撃を受け、震災直後は生きものの姿が消えたそうです。蒲生干潟の自然保護活動を行ってきた「蒲生を守る会」（1970年～）により、震災後も調査活動が続けられ、干潟の再生が見守られています。

東日本大震災後、東北各地の海岸では、数十年から百数十年の頻度で発生する津波を防ぐことを目的に、地域ごとに津波高が想定され防潮堤の復旧工事が進められてきました。蒲生干潟がある仙台湾岸においては、高さ7.2m、幅40mの巨大防潮堤をつくる建設計画が出され、干潟の一部が埋め立てられ、周囲も建設工事によって打撃を受けることから、蒲生を守る会を中心とした市民は、計画変更を求める活動をおこないました。活動により、堤防の位置が陸側に数10m変更（最大約80mセットバック）されることになりました。

この日、熊谷先生の案内でもとの堤防の上を歩きながら、当初の防潮堤の建設計画の位置について教えていただきました。セットバックにより守られたところには、ヨシ群落や湿地、水路などがみられます。それらは小規模に残されている印象

を受けました。熊谷先生は、蒲生干潟の背後に広がる湿地や、松林、ヨシ群落とのつながりがあって干潟の豊かな生態系が育まれていることを行政にも子どもたちにも伝えられてきました。今後も、防潮堤ができたことによる生態系への影響を見ていく必要もありますが、活動に参加する新しいメンバーがなかなか現れないこともお聞きしました。熊谷先生が蒲生干潟での活動をはじめたのは、大学時代に友人に誘われたことがきっかけとことです。そこから長年の活動に至るまでの理由については詳しくお聞きしませんでした。蒲生干潟にそれだけの自然のすばらしさや魅力があるからこそだと思います。若い人たちには、こうした活動に参加するきっかけができてほしいと思いました。

### 新浜(仙台市宮城野区)

蒲生干潟から南へ約2km、熊谷先生、黒沢先生の案内で「新浜みんなの家」を訪れ、遠藤源一郎さんにお会いしました。海辺から約1~1.5kmのところにある新浜の集落は震災で高さ4mを超える津波に襲われて、住民の1割以上が亡くなりました。当初は県道塩釜亘理線(県道10号)をかさ上げて海側を災害危険区域にすることが発表され、地域のほとんどが居住できないエリアに想定されましたが、住民の強い要望で、海から1kmほどのところを通る市道をかさ上げすることで、第2堤防の役割をもたせられるとの話になり、みんなの家の海側の市道が東部復興道路(かさ上げ道路)として整備され、住民がこの場所に残ることができました。海辺には高さ7.2mの海岸堤防がで



みんなの家にて



カントリーパーク新浜が活動する田んぼ(↑)

きますが、それでも東日本大震災クラスの津波がきたときには2m以上の津波に襲われることになるため、約6mかさ上げした第2堤防が必要とされました。「みんなの家」は、熊本県の協力により、2011年10月につくられ被災した多くの人たちの憩いの場となってきました。2017年に仮設住宅のところから現在の場所に移築されてからは、新浜町内会が管理しています。室内は明るく、木のぬくもりが感じられる素適なところでした。

遠藤さんは以前は地元の新浜は特徴がないと思っていたそうですが、東北学院大学教授の平吹喜彦先生と出会い、仙台湾岸の海岸の自然環境についてまとめられた「パンフレット『海辺のいのちのメッセージ』」を住民に配布してほしい、新浜の自然は貴重」といわれ、最初は疑問に思われていましたが、その後開催された学習会や、歴史専門の先生方から学んだことで意識が変わったそうです。平吹先生と仲間たちのおかげで、地元住民が誇りを取り戻すことができたと話されていました。平吹先生の働きかけ、遠藤さんの理解を深める姿勢、学習会などの活動が人から人に影響して、地域の多くの人たちが自然や歴史の点から地域の良いところを大事にしようと活動するに至っ

たことが素晴らしいと思いました。新浜町内会発行のパンフレット「ふるさと新浜マップ 2023」は、地域の自然や歴史を再認識しながら取組まれている新浜の現在を読み取れる内容となっています。



見開きに地域の鳥観図を掲載



みんなの家を出発した後、遠藤さんの案内で、海辺から約500mのところにある「カントリーパーク新浜」が活動するピオトープを見学しました。震災後、農地の復旧工事により除塩作業がおこなわれ、田んぼができるようになりましたが、集団移転した跡地では、仙台市が土地を買い取り、意欲ある市民や事業者へ貸し出しされています。新浜では地域の方が中心となり、専門家も参加して、カントリーパーク新浜が立ち上げられ、跡地の活用が考えられました。2018年より、ピオトープをつくり、農薬や化学肥料を使わない農法で農業がおこなわれ、田植えや稲刈り体験・生きもの観察会がおこなわれています。

### 防潮堤と海岸防災林(宮城県)

新浜を出発してからは、黒沢先生の案内で、新浜から福島県相馬市にかけての海岸防災林と防潮堤の状況を見ることができました。黒沢先生は、ご案内いただいている中でも植物の標本採集や記録を手際よくおこない、常に現地で起こっていることを記録していく専門家の姿勢が伝わりました。そして今回の案内では、黒沢先生が何度も現地に足を運び、調べたり考察してわかってきたことを、わかりやすく説明してくださいましたので、深い学びとなりました。

時間が押して夕暮れ時となりましたが、新浜の海側のあたりの防潮堤を訪れました。平吹先生たちの働きかけにより、堤防の一部がセットバックされ、砂浜の植物が守られたところがあります。減少する海浜植物を守るための重要な場所となっています。このあたりの海岸堤防には、近くの七北田川河口の浚渫土が試験的に被せられ、そこに

海浜植物も生えています。「しかし、そもそも海側に堤防が必要だったのか」、黒沢先生の言葉の意味するところがすぐにはわかりませんでした。通常は行政の建設部門が管轄するところに堤防が計画されることから、海岸林の海側に堤防が作られることになるといいます。そのことをお聞きして、堤防を建設する場所が、様々な思惑により最適な場所に設置されているわけではないことに気づかされました。確かに、河川でも同じような面はあり、まして災害復旧で迅速さが求められる時に、担当の管轄エリアで建設計画がすすめられるのは当然のことかもしれません。しかし、工学的には海岸林の内陸側に堤防が作られたほうが良いとのことで、非常に残念な状況になっていることを感じました。黒沢先生が指摘されるように、もし、海岸林より内陸側に堤防ができていれば、貴重な砂浜の生態系への影響ははるかに少なかったと考えられるからです。

巨大堤防を作るために大量の山砂が山から運び出された問題も指摘されました。山砂が大量に使われたのは、防潮堤の内陸側につくられたクロマツの海岸防災林に造られた地下水位から3m盛り土です。山砂で盛土したところに植栽することがマニュアル化されたためです。しかし、山砂は水はけが悪いのでクロマツの植栽には適しませんでした。クロマツの根が張らないことがわかり、盛り土したところに配管を入れたり、場所によっては工事のやり直しも起きているとのことでした。

2日目は、最初に「鳥の海」へ行き、北側から西回りで海岸へ出て、堤防の内側に広がる塩性湿地を確認しました。貴重な環境になっている様子がうかがえました。つぎに宮城県岩沼市の「緑の防



潮堤」を訪れ、堤防の陸側斜面に盛土して樹木が植栽された様子を見学しました。距離約100mの範囲です。海風が強く吹き付けるため、樹木の生長はある程度の高さで止まっていました。ここは、海側に砂浜が広がり、海浜植物も何種類もみられました。気持ちの良いところで、砂浜には点々と釣り人がいました。

### 防潮堤と海岸防災林(福島県)

海岸防災林の様子が、宮城県と福島県で異なることを黒沢先生が指摘されていました。宮城県では防潮堤の陸側や松林に、なにも施工していない空き地があるため、そうしたところにハマヒルガオなどの海浜植物がみられます。福島県相馬市の大洲海岸の防潮堤の上に立つと、同じ海岸防災林でもこれまでみた防災林との環境の違いがわかりやすく確認できました。きっちり整然と植栽されているからです。防潮堤防の斜面下まで客土されているので、海浜植物が入り込む余地が無いということです。人為的に植栽される場所であっても、砂浜からつづく自然環境であり、植栽のされ方も自然環境への配慮が必要であると感じました。

大洲海岸は、一直線につづく巨大防潮堤と、汀線にテトラポット（消波ブロック）が連なります。釣り人の姿はありません。このあたりは震災前にはすでに砂浜の減少により、所々に沖にテトラポットが置かれていたそうです。砂浜を守るために設置されていたテトラポットが、渚を埋めることになっているという哀しい状況です。テトラポットから堤防までの距離は10～20mほど。移行帯（エコトーン）ができる幅が無く、生育できる海浜植物も限られているとの説明がありました。

### 松川浦周辺の干潟と塩性湿地

大洲海岸の西側（内陸側）には松川浦があります。もともと大洲海岸は、外洋と松川浦を隔てるようにできた砂州でした。その大洲海岸と松川浦の間には、海岸防災林がありましたが、津波により木が倒れ、壊滅的な被害を受けました。しかし、そこに貴重な生態系が生まれていることがわかり、事業の担当者達が保全に理解があったことから、事業を担当する福島県農林事務所と林野庁、研究者で委員会を組織し、そこでの決定に基づき塩性湿地や干潟の一部が保全区域として設定されました。保全区域はいずれも松川浦に面した砂州の西側で、北から古湊干潟、大洲再生干潟、グラウンド干潟の3つの干潟があり、歩いて見ることができました。津波や地盤沈下でできた干潟や塩性湿地を保全する試みは、例のない取り組みだったといいます。震災前に松林の管理のために使われていた水路が、潮の満ち引きに応じて海水が出入りするよう残され、復旧工事で盛土されたにもかかわらず、9.5haの保全区域のうち2.5haを元の地面まで掘り戻し、植林地との間に緩やかな傾斜の移行帯が設けられました。このような再生に向けての色々なことが検討・工夫された画期的な取り組みです。また、古湊干潟と大洲再生干潟のある場所は、もともと保安林であったため、通常は速やかに海岸林に戻さないといけませんが、湿地のまま保全する計画変更を県の出先から本庁を通じて林野庁、財務省まで戻して認めてもらったといいます。広く守られた干潟では無数のアシハラガニが動いていました。

※本視察見学は、未来につなぐふるさと基金を活用して実施しました。（文：川原奈苗）

# 河北潟カヌー体験・カヌーでごみ拾い

河北潟につながる川の一つ、森下川の河口付近で、カヌー体験と共にごみ拾いを行うイベントを実施しました。親子で、友人同士で、ご夫婦で、様々な方に参加いただき、3チームに分かれ交代制でカヌーに乗りました。カヌーについては、河北潟カヌークラブの皆様にご指導いただきました。

はじめに陸上でパドルをもち、持ち方や漕ぎ方を教わりました。万が一カヌーが転覆した時の脱出方法も教わります。陸上でのレクチャー後、実際にカヌーに乗って河北潟へ漕ぎだしました。森下川の河口にはヒシ群落があり、カヌーに乗ることで、水面に咲いているヒシの花を間近に観察することもできました。川岸や湖岸にも植物があり、一見してきれいに見える景色ですが、植物の下にはごみがたくさんあります。カヌーを操作しながら、水上からごみを拾いました。

カヌーにのっていない陸上チームは、湖岸のごみ拾いを行いました。レジ袋にまとめて捨てられたごみの他、土に混じったこまかなプラごみがたくさんありました。ごみ拾いの他、研究所スタッフより、かつての河北潟ではたくさんの人が舟で湖面に出ていたこと、干拓で大きく環境が変わったこと等、河北潟の歴史や生きもの、自然について解説を行いました。

参加された方からは「カヌーに乗ることで視線が水面に近くなり、いつもと違う景色を楽しむことができた」、「河北潟の歴史がとても勉強になった。ごみ拾いもどんなごみが落ちているか見ながら活動ができてとてもよい経験ができた」、「家族で貴重な体験ができた」といった感想がありました。カヌーについては、なかなか思った方向にすすめず、操作が難しかったけどとても楽しかった、また河北潟でカヌーに乗りたい、というご感想を複数いただきました。

この日から「河北潟流域ごみ拾いスタンプラリー」も開始しました。河北潟流域でのごみ拾いに参加するごとにスタンプがたまり、6個集めると記念品がもらえます。継続したごみ拾い活動への参加を促すものです。ごみのない河北潟で、カヌーを楽しむことができるよう、たくさんの人に参加いただけることを願っています。

この日は、約16kgのごみを水辺から回収しました。途中で雨が降り一時中断しましたが、無事に終わることができました。ご参加いただいた皆様、ご指導、ご協力いただいた河北潟カヌークラブの皆様ありがとうございました。

※この活動はエフピコ環境基金の助成を受けて実施しました。（文：番匠尚子）



## 第69回 ヤモリ



家を守ると書いてヤモリ、人家に住みついて毎晩のように人の目に触れる場所に現れるので、人によっては気味の悪い生きものとみられます。本当は家に住む害虫を食べてくれる、人にとっては有益な生きものです。昼間はひっそりと建物の隙間などに隠れていて、夜になると灯火に寄ってくる昆虫などを食べて暮らしています。とても臆病でおとなしい生きものです。指に趾下薄板<sup>しかはくばん</sup>という器官があり、そこに生えている剛毛を、ガラスや壁面の細かなへこみや傷などに引っかけてへばりつき、垂直な壁を登ったり天井を逆さに動き回ることができます。

私の家には猫が4匹居ますが、ヤモリは猫たちのお気に入りです。窓際からガラス越しにいるヤモリを恨めしそうに眺めています。時々、前足でちょっかいを出そうとしますが、ヤモリは気にする気配はありません。猫が時々外に出てしまい、なぶり者にしたヤモリを連れて帰ることがあります。大概是尾が切れていて、自切したことが分かります。だいぶ弱っていますが、まだ生きていることが多いので、外に逃がしてやるようにしています。

河北潟地域にいるヤモリは、正確にはニホンヤモリといいます。河北潟干拓地には人家がないからか、または野猫が多いからなのか、ほとんどヤモリを見かけませんが、河北潟の周辺の集落ではヤモリをよく見かけます。山間部にもおり、流域の広範囲に住んでいるようです。

以前、新潟で暮らしていたときにはヤモリを見たことがなく、金沢に越してきてからは普通に見かけるようになり、同じ北陸でもずいぶんと違うものだと思っていました。ヤモリは基本的に南方系の生きものであることから、東北より北には分布しておらず、日本海側では金沢～新潟間で生息限界があるように思っていました。一方、新潟時代の研究室の同僚が

山形大の出身の人で、秋田県の酒田にはなぜかヤモリがたくさん居て、わざわざ山形から見に行ったということを知っており不思議に思っていました。

最近の研究で、ヤモリはもともと日本には住んでおらず、約3000年前に中国から九州に渡来し、その後、近畿、東海、関東に進出し、戦国時代に近畿から北陸に移り、その一部が江戸時代に北前船で新潟を飛び越して酒田へと移住したことが推定されました（[https://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/pressimg/tohokuuniv-press20221201\\_02web\\_gecko.pdf](https://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/pressimg/tohokuuniv-press20221201_02web_gecko.pdf)）。新潟でみかけなかったヤモリが酒田にいる謎が解けました。環境省の侵入生物データベースでは、現在、長野県と鹿児島県を除く本州、四国、九州に分布しているようです。

爬虫類なので、陸に卵を産み、産まれた幼体は肺呼吸で陸上生活のまま成体になります。よく間違われるイモリは両生類で、水中で卵を産み、幼生は水の中でえら呼吸をしています。変態して陸に上がり、陸上生活ののち産卵を機会として水中に戻り、多くは産卵後もそのまま水中生活を送ります。（文：高橋 久）

## 七豊米13年目の稲刈り

2024年の稲刈りは9月16日～28日、お天気や田んぼの状況を見ながら数日に分けて実施しました。9月23日の稲刈り体験では、足元がぬかるむ中で作業となり、大変でしたが参加者皆さんの頑張りににより、稲架掛けまでできました。稲架場は、体験イベントの前日にボランティアで協力いただいている皆様と一緒に作りました。稲刈り後、晴天が続かなかったこともあり約1か月稲架干しし、10月には無事に脱穀、収穫できました。

体験イベントの参加者よりいただいた感想を下記に掲載します。

- ・田植え体験と連続して稲刈りができてとてもありがたかったです。虫の説明もありがとうございます。子どもたち大喜びです。
- ・年長と年少の子どもと参加しました。普段何気なく食べていたお米が、どんなふうに生えているのか、どうやって収穫されて食卓にならぶのか、五感で学ぶことができて楽しかったです。田んぼに暮らすいろいろな生きものについても、職員の方々が丁寧に教えてくださり、本当に貴重な体験をつめました。ありがとうございました。
- ・ハサに掛ける稲刈りははじめてで、とてもいい経験になりました。機械のことや、干し加減など、いろいろおしえていただき、今後の参考にさせていただきます。ありがとうございました。
- ・雨の後でぬかるんでいましたが、楽しく参加できました。下の子は泥に悪戦苦闘していましたが、2人とも楽しかったと言っています。2人とも思っていたより手際よくできていたと思います。
- ・子どもが稲刈りをしたいと言い出したものの、どこでさせたらいいのかわからず、途方に暮れて、インターネットでやっと見つけたのですが、思っていた以上にしっかりと稲刈りをさせてもらえて嬉しかったです。子どももとても楽しんでずっと稲刈りをしたいと言っていました。親もとても学べました。



## 外来種セイタカアワダチソウを活用した環境体験イベント

11月2日、一般財団法人サニクリーンアカデミーによる「サニエルおやこプチ・ネイチャーツアー」がこなん水辺公園にて開催されました。日本自然保護協会よりお声かけいただき、一緒に体験イベントの企画・運営をさせていただきました。当日は台風の接近により雨が降り、イベントの中止も心配されましたが、数組の親子に参加いただけました。河北潟のことや、セイタカアワダチソウについての学びや観察の時間がしっかりとれたことで、興味が深まることにもつながったように思います。身近なところにたくさんある外来植物を活かす楽しい取り組みとなって良かったです。「参加して良かった、自然に対して関心が出た、知識が得られるにつれ積極的に参加していた、草木染が楽しかった、保全活動など次につなげたい、お米がおいしかった。」といったご感想をいただきました。日本自然保護協会のスタッフの皆様の適切で細やかなサポートに学ぶことが多く、大変貴重な経験となりました。



## 編集後記

多くの協力によりつくられた稲架は美しいです。稲刈り作業は手間がかかり大変ですが、毎年少しずつ違う出来栄で、参加する人たちも少しずつ変わります。13年目の稲架も美しかったです。(N)